

論文

オッカングム『ホモセクシュアルな欲望』における『アンチ・オイディプス』の使用例——欲望の理論の観点から

南 匠真*

How does Hocquenghem use *Anti-Oedipus* in *Homosexual Desire*? Application of the theory of desire

MINAMI Shoma

論文要旨

ドゥルーズとガタリは、『アンチ・オイディプス』を道具のように用いることを読者に勧めていた。本稿はそのような使用の失敗例としてオッカングムの『ホモセクシュアルな欲望』を検討することで、よりよい『アンチ・オイディプス』の使用法の開発に貢献することを目的とする。『ホモセクシュアルな欲望』において『アンチ・オイディプス』が提示した欲望の過程は目指すべき目標として設定されていた。目的も目標もない欲望の過程それ自体を目的とすることは欲望の過程を停止させてしまうが、FHARの同性愛運動が陥ってしまった言行不一致の状態は欲望の過程の停止の実例として解釈できる。一方ドゥルーズ＝ガタリは欲望の過程それ自体を目標としない独自のスキゾ分析を考案した。

キーワード 『アンチ・オイディプス』、ギイー・オッカングム、『ホモセクシュアルな欲望』

Abstract

Deleuze and Guattari urge readers to refer to their book *Anti-Oedipus: Capitalism and Schizophrenia* as a tool rather than merely interpret it. This paper argues that Guy Hocquenghem's *Homosexual Desire* is an instance of a failed attempt to apply *Anti-Oedipus* to reality. This thesis makes a contribution to the development of new means of using *Anti-Oedipus*. The reason for the failure of *Homosexual Desire* is that it interprets *Anti-Oedipus*'s definition of "free desire" as a goal to be realized. Because free desire in and of itself can have no goal or purpose, Hocquenghem's attempt to realize it as a goal causes it to cease to act as a desire. Deleuze and Guattari devised a method of analysis that does not desire as its goal in Schizoanalysis.

Keywords: *Anti-Oedipus*, Guy Hocquenghem, *Homosexual Desire*

* 大阪大学大学院 人間科学研究科博士後期課程2年 ; m.shomah8@gmail.com

1. はじめに

ジル・ドゥルーズ (1925-1995) とフェリックス・ガタリ (1930-1992) の共著である『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症』(1972) は、毀誉褒貶を受けながらもフランスにおいてベストセラーとなり、二人はその後しばしばこの著作に関して人々から解説を求められるようになった。その際に話題になるのが、『アンチ・オイディプス』においては、書物それ自身が機械であり道具であり、何が書かれているかということよりもどのように機能するのが重要だ、ということである。著者の一人であるドゥルーズ (1990:36; 2007:50-51) は、『アンチ・オイディプス』の読み方について次のように述べている。

問題はこの本が機能するかどうか、機能するとしたらどのように機能するのか、そして誰のために機能するのかということを知るところにある。『アンチ・オイディプス』を何度も読み直すのではなく、『アンチ・オイディプス』とは違うことを行うべきなのです。

つまり、『アンチ・オイディプス』を読み、それをいかに応用するかが著者と読者にとって問題だということである。実際『アンチ・オイディプス』は、その政治的な性格も手助けして、刊行直後から多くの読者を獲得しつつ、様々に機能し、応用されてきた。

本稿が論じるのは、『アンチ・オイディプス』を応用する試みとしては最も早い部類に入るであろうギョー・オッカングム (1946-1988) の『ホモセクシュアルな欲望』(1972) についてである。オッカングムは1970年代から80年代にかけて活躍したフランスの同性愛運動の活動家として知られており、とりわけ、1971年に結成されその後のフランスの同性愛運動に大きな影響を与えたFHAR (革命行動のための同性愛者戦線) において中心的な役割を担ったことで有名である。『ホモセクシュアルな欲望』はFHARの運動の理論的な集大成であり、『アンチ・オイディプス』の精神分析批判や資本主義批判を応用しつつ、(男性)同性愛的な欲望に基づいた独自の革命の理論を構築している。この先駆的な著作は(男性)同性愛を中心的な主題に据えているものの、性そのものが持つ「転覆的な」(subversif) 力を描き出して

いる。異性愛と同性愛の二項的な対立や、性を何らかの枠組みに当てはめることそのものを問題視するクィア理論の代表的論者であるイヴ・コゾフスキー・セジウィック（1950-2009）（2010:157）は、この著作を論じる際にオッカングムを「クィア理論以前のクィア理論家」と評価している。

本稿がオッカングムの『ホモセクシュアルな欲望』を扱うのは、単に同性愛運動における『アンチ・オイディプス』の歴史的な意義を明らかにするためではない。むしろ、オッカングムによる『アンチ・オイディプス』の読解とその応用がある種の典型的な失敗例として分析されるべき価値を有していると思われるからこそ本稿は彼の著作を扱うのである。結論を先取りして述べるなら、オッカングムは『アンチ・オイディプス』の欲望の理論を見事に（男性）同性愛的な欲望の理論へと変化させたものの、そのような欲望の理論を実現すべき理想的状態として思い描いてしまったのである。確かに『アンチ・オイディプス』は、資本主義社会と精神分析的な実践が欲望を存在論的な次元からいかに抑制しているかについて全編にわたって論じており、欲望が肯定されるべきものであると主張しているように見える。その一方で、ドゥルーズ＝ガタリ（1972:87-88; 2006:上 114）は欲望を抑圧するフロイトのエディプス・コンプレックス的⁽¹⁾な枠組みが厳然として社会に存在することを認めているし、彼らが否定しているのは、それが欲望そのものや「無意識の産物」であるように見えてしまうという錯覚である。それゆえドゥルーズ＝ガタリはエディプス的なものを完全に消去して欲望だけが自由に行きかうような状況を目指そうとしているのではない。

しかしながら、オッカングムは、同性愛に抑圧的な社会と（男性）同性愛的な欲望を対立させ、後者を実現すべく同性愛運動に参加した。あるいは少なくとも、『ホモセクシュアルな欲望』において、FHARのような同性愛運動が欲望の状態を体現するような集団であると彼は解釈した。『ホモセクシュアルな欲望』における『アンチ・オイディプス』の読解は、このような意味で欲望の理論そのものをどこか裏切ってしまうのである。『ホモセクシュアルな欲望』における『アンチ・オイディプス』読解のある種の不十分さを検討することは、現代において『アンチ・オイディプス』を応用するに際しても無駄なことではない。というのも、近年の『アンチ・オイディプス』研究やドゥルーズ＝ガタリの哲学を通じた実践においても、欲望の理論を目指すべき理想的状態として実現しようとする傾向が依然として見られる

からである。無論そのような傾向を有しているからといって『アンチ・オイディプス』の応用が無意味なものになるわけではなく、使い方は人それぞれであり、ドゥルーズ＝ガタリもそのことを初めから肯定していた。しかしながら、欲望の理論をいかに使用するかという方法そのものについて検討することは、これまで以上に創造的な『アンチ・オイディプス』の読解や応用を生み出すことに貢献しうるだろう。

以上の議論を踏まえ、オッカングムの『ホモセクシュアルな欲望』が『アンチ・オイディプス』の欲望の理論をどのような仕方で使用したのかを明らかにし、その不十分さを指摘することが本稿の目的である。オッカングムによる『アンチ・オイディプス』解釈の不十分さを理解することは、今後のよりよい『アンチ・オイディプス』の応用へとつながるだろう。

本稿は以下の順に議論を進める。第2節ではFHARという運動の内実についてその全体像を概観する。第3節では『ホモセクシュアルな欲望』が依拠している『アンチ・オイディプス』の欲望の理論を検討する。第4節では『ホモセクシュアルな欲望』の(男性)同性愛的な欲望の理論においてオッカングムがどのように社会を分析し、その分析に基づいてどのような戦術を取ることで社会の正常性に対抗しようと試みたのかを明らかにする。第5節では『ホモセクシュアルな欲望』が『アンチ・オイディプス』の欲望の過程を実現すべき目標として掲げたことによって、当の欲望の過程を停止させてしまうという矛盾を取り上げ、FHARの停滞がそのような欲望の過程の停止として解釈されうることを示す。第6節では『ホモセクシュアルな欲望』による『アンチ・オイディプス』の応用の評価の困難さについて指摘し、ドゥルーズ＝ガタリによる欲望の理論の応用との相違を指摘する。

2. FHARについて

ギー・オッカングムの『ホモセクシュアルな欲望』は、資本主義批判や当時のフランス共産党に対する反感、男性同性愛を扱う文学作品など様々な主題について論じているが、とりわけ精神分析における同性愛の議論への批判に多くのページを費やしている。そして、著作全体の方向性や用いられている概念からは『アンチ・オイディプス』の大きな影響が見てとれる。

その一方で、『ホモセクシュアルな欲望』はオッカングムが当時参加していた FHAR という同性愛運動の実践に基づいて著されたということが指摘されている（市田 1992:198; Huard de la Marre 2009:21）。つまり『ホモセクシュアルな欲望』において、オッカングムは『アンチ・オイディプス』の欲望の理論を通じて、FHAR という運動がどのようなものであるかを明らかにしようと試みたのだと考えられる⁽²⁾。ここで注意したいのは、FHAR が『アンチ・オイディプス』を応用するべくなされた運動ではないということである。というのも、FHAR の結成時（1971 年）に 1972 年刊行の『アンチ・オイディプス』を読むことはできないからである。本稿が示したいのはまず、『ホモセクシュアルな欲望』が『アンチ・オイディプス』を読解しつつ、FHAR の活動を（男性）同性愛的な欲望の理論によって解釈し、FHAR のような欲望の過程を実現する集団を通じての一種の性的革命を説いた、ということである。次に、オッカングムによる『アンチ・オイディプス』の応用的な読解を踏まえると、FHAR の活動の停滞もまた、『アンチ・オイディプス』の欲望の理論によってある種の欲望の停止状態として解釈可能であると本稿は考える。というのも、無際限な接続と切断の運動である欲望の過程は、それ自体が実現されるべき目標として設定されることによって、その自由な本性を失い、停止してしまうからである。そしてこれらの論点を踏まえ、『ホモセクシュアルな欲望』における『アンチ・オイディプス』読解のどこが不十分であったのかを明らかにすること、これが本稿の目的である。これらの事項については順に論じていくが、まずは FHAR がどのような運動であったかを概観したい。

FHAR は 1971 年にフランスで結成された。同性愛を個人の道徳的な問題に還元し、同性愛者に社会への同化を強いるそれまでの同性愛団体とは異なり、FHAR は同性愛的な欲望に社会転覆的な力を見出し、そこからあらゆる正常性の破壊を目指すというラディカルな性格を持っていた。FHAR はアメリカでの同性愛解放の動き（Girard 1981:89; Sibalis 2005:270）や五月革命における性的解放の余波、また MLF（女性解放運動）のようなフェミニズム運動の影響（Girard 1981:101）を受けて初めは女性たちによって結成された運動である。また、五月革命において同性愛が排除されたことから、五月革命を主導した「左翼急進主義者」（gauchiste）に対する反感がその原動力になったと指摘されている（Idier 2017:84）。

FHAR は階層構造を持たず、リーダーとなる指導者もそこにはいなかった (Girard 1981:87)。具体的な活動内容としては、デモやビラ・小冊子の配布、毎週木曜の総会に加えて、暴力を伴った妨害行為など多岐にわたった⁽³⁾。FHAR は同性愛運動であったがその標的はあらゆる社会的規範だった (Girard 1981:92)。それゆえ FHAR は、イタリアの同性愛運動である FUORI (イタリア同性愛革命統一戦線) に連帯し、また初期には MLF との協力関係にあっただけでなく、環境保護運動のデモに参加する (Hocquenghem 2000:168-169; 1993:153) など性の領域を越えた運動を試みていた。

しかし FHAR は同性愛者の権利要求や反同性愛的な法の改正を目標とすることはなかった (Sibalis 2005:275)。FHAR は法の内容よりも法それ自体が持つ抑圧的な性格を問題にしたからである。それゆえ FHAR の様々な活動は、同性愛が人々にとって問題であることを知らしめたが、それ以上に大きな成果を上げたわけではなかった。むしろ FHAR は後続の同性愛運動や団体を生じさせるきっかけとなったという点において大きな功績を挙げたと言えるだろう (Sibalis 2005:275)。

さらに FHAR は活動の初期から既に様々な問題を抱えていた。まず FHAR がフェミニズム運動に携わる女性によって設立されたことを先に指摘したが、FHAR が人数を増やすにつれて男性の比率が高くなり、それに合わせて女性の排斥が起こるようになった (Sibalis 2005:271)。リーダーを定めず組織としてのまとまりを初めから欠いていたがために FHAR は常に不安定さを抱えていた。そのような集団において参加者が増加していくなら、その内部がますます混乱していくのは明らかなことである。FHAR の総会は政治集会というより単なる出会いの場としての側面が大きくなっていった (Sibalis 2005:271-272)。

オッカングムが『ホモセクシュアルな欲望』を刊行した 1972 年にはすでにこれらの兆候が現れていた。とはいえ FHAR が切り開いたラディカルな同性愛運動の領域はフランスにおいて前代未聞のものであった。それ以前に同性愛に対する社会的抑圧からの擁護や同性愛の正当化を行ってきたのは「アルカディア」(Arcadie) という雑誌だったが、そこで同性愛は個人的かつ道徳的な問題として捉えられており、アルカディアは差別的な法や社会的規範を変えようとすることなくむしろ読者がそれらに適応できるように道徳的な教育を施そうとしていたのである⁽⁴⁾。

では具体的にオッカングेमは同性愛についてどのように考えていたのか。彼は同性愛を個人的な問題として捉えることを拒否する。彼は、社会がいかにして欲望を抑制し、その結果同性愛や異性愛といった排他的に限定された性の形態が生じるのかを論じた。次節では『ホモセクシュアルな欲望』を検討する前に、そこで下敷きにされている『アンチ・オイディプス』の欲望の理論を確認する。

3. 『アンチ・オイディプス』における欲望の理論

『アンチ・オイディプス』において「欲望」(désir) は単に人間や生物が抱く生命的欲求や性的欲求に限定されるものではなく、存在論的な次元における物事の動きを表す概念である。欲望は個人的なものや社会的なものといった形態を取り得るが、そのような形態に限られるものではない。むしろ欲望という概念は、そのような形態がそれなくしては実現しえないところの「質料」(matière) の動きのことを指し示している。ドゥルーズ＝ガタリが欲望を論じる際に持ち出すのが口と乳房の例である。

口と乳房の組み合わせは、言語使用能力が未発達な子供を精神分析の俎上に載せたことで知られるメラニー・クラインの精神分析理論において生まれたばかりの幼児が置かれる最初の状況を参考に行っていると思われる。つまりミルクを吸う幼児の口と母親の乳房という対である。しかしドゥルーズ＝ガタリにとって口と乳房の関係は子供や母親といった帰属先としての全体的対象を持たないのであり (Deleuze et Guattari 1972:52-53; 2006:上 86-87)、端的に器官同士の交流として捉えられる。口と乳房の関係は人間同士の関係を表すものではなく、物質的な質料同士の関係を示しているのである。

口と乳房がやり取りするのはミルクである。口は乳房へと接続され、ミルクを乳房から切断することで、乳房と口との間にはミルクの流れが生じる。その次には食道が口へと接続され、そこで新たなミルクの流れが生じることになるだろう。このような切断と接続の動きはあらゆる方向に向かって続けられていく (Deleuze et Guattari 1972:11; 2006:上 22)。このとき口と乳房という対は、口と乳房のその場限りの関係においてそのような形を取って

いるにすぎない。例えば口は食道を接続するとき、それはもはや乳房に接続されたのと同じ口ではない。というのも、乳房からミルクを受け取る時の口の感覚と食道へとミルクを受け渡すときの口の感覚は異なるからである。このことは、口と乳房の関係の参照項となっているクライン派精神分析理論において析出された幼児の経験からしても明らかである。生まれたばかりの幼児は自らの身体感覚における同一性を獲得しておらず、様々な感覚が押し寄せては消えるという圧倒的な経験の最中にある（松木 1996:12）。その際に口が口として幼児に認識されるのは、口が何らかのものを含み口に感覚が生じたときであろう。そしてその感覚は口の中にあるものの感覚と一体になっており、それゆえ口は固定された場所に存在する身体部位というよりも、そのつど異なる感覚それ自体として存在する。ドゥルーズ＝ガタリは幼児のこのような経験を存在論的な運動へと読み替え、変化し続ける器官同士の切断と接続の運動を自ら理論の根底に据えた。

このような器官同士の動きが欲望と呼ばれる。ドゥルーズ＝ガタリはこの存在論的な欲望の過程を『アンチ・オイディプス』の基礎に据え、物理学的、生物学的、社会的な領域にまで欲望の過程を見出していく。以下で論じる社会的な領域での例を挙げるならば、二人の人間の間で何らかの交流がなされ、それによってお互いがそれ以前とは全くの別人であるかのように変化してしまうような経験である。重要なのは、この例において人が変化するためには必ずしも二人の個人が必要だとは限らないということである。個人対複数人、あるいは複数人对複数人、さらに言えば個人が人間以外の何かに触発される場合にも欲望の過程は見出せる。またここで社会的な領域を例に挙げているために一人の人間がここでは登場しているが、もちろん物と物の関係においても欲望の過程は見出されうる。ドゥルーズ＝ガタリはこのような欲望の領域を性と結びつける。器官の接続と切断は本質的には人間的な対象や目標を持たない「非人間的な性」(sexe non humain) (Deleuze et Guattari 1972:350; 2006:下 149) なのである。

このような自由な欲望の運動を抑制し、それに一定の秩序を与えるのが社会であり、資本主義社会においてはとりわけエディプス・コンプレックス的な枠組みによって自己同一的で人間に固有なセクシュアリティを持った主体が形成される。ドゥルーズ＝ガタリによれば、具体的には次のような手管が用いられている。まず、父母子といった全体性を持った人物に器官を帰

属させ、それらの人物を超越の対象である「ファルス」(phallus)によって区別する。ファルスは一般には男根の象徴と見なされるが、ここでドゥルーズ＝ガタリは精神分析理論におけるエディプス・コンプレックス論を独自の解釈を加えつつ参照している。この場合ファルスとは相互に区別可能な全体的人物を生み出すと同時にその区別の基準そのものであり、それゆえファルスを欠如する仕方の違いによって男女の別が成立する (Deleuze et Guattari 1972:70; 2006:上 115)。ファルスを初めから欠如している者が女性でありファルスを奪われた者が男性である。幼児は、すでに幼児期を経て全体的人物へと成長した両親との関係に生まれるやいなや投げ込まれるが、そこで両親との関係においてファルスを欠如した全体的人物へと成長させられるのである。しかし幼児はこの関係から逃れることは通常できない。なぜなら両親との関係の外には全くの無秩序が広がっているからである (Deleuze et Guattari 1972:93; 2006:上 153-154)。幼児はこのような仕方で脅され、両親との関係に入ることを余儀なくされる。こうして幼児はエディプス・コンプレックスの状況に陥り、両親を欲望の対象とするが、それはもう一方の両親の存在によって頓挫することになる。このときもはや欲望は器官から器官への流れの運動ではなく、全体的人物に対する局所的器官の使用へと制限され、欲望は制限された形態へと置き換えられる (Deleuze et Guattari 1972:136-137; 2006:上 220-221)。こうして性は人間的なものへと制限される。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、欲望による自由な接続と切断の過程は以上のような仕方で制限される。しかしながら、エディプス的な枠組みは欲望の運動なしには存在しえない。つまり欲望は家族という社会的なものによって抑制されるが、社会的なものは欲望の過程なしには存在しない以上、両者はある種の相互関係にある。このことは、社会が常に、「潜在的に社会形態を吹き飛ばすような何かを持っている」 (Deleuze et Guattari 1972:136-138; 2006:上 224) 欲望と隣り合わせであることを意味している。ドゥルーズ＝ガタリは、欲望の過程において器官がそのつど流れを作り出しながら離合集散する性質を「分子的」(moléculaire)と呼び、欲望を一定の枠組みに当てはめ一つのまとまりとして扱おうとする社会的なもの性格を「モルの」(molaire)と呼ぶ。ドゥルーズ＝ガタリは、物質量の単位であり一定の数の粒子を含むとされる化学用語であるモルになぞらえて、分子的なものが社

会的なものによってその自由な性格を失う事態を表現した。

『アンチ・オイディプス』における欲望の理論とはおおよそこのようなものであるが、次節ではこれを基にしてオッカングムが構築した同性愛的な欲望の理論を概観したい。

4. 『ホモセクシュアルな欲望』における同性愛的な欲望の理論

4.1 反同性愛的な社会の分析

オッカングムは、『ホモセクシュアルな欲望』において、同書における同性愛とは主に男性同性愛を指している⁽⁵⁾と前置きをしつつ (Hocquenghem 2000:23; 1993:13-14)、社会がパラノイア的な仕方でも同性愛的な欲望を抑制しているのだと分析する。しかしながら彼によれば、「反同性愛的な抑制がそれ自体同性愛的な欲望のある種婉曲表現である」(Hocquenghem 2000:31; 1993:21)。つまり社会もまた同性愛的な欲望を有しているのである。このような議論の根底にあるのはジークムント・フロイト (1856-1939) のパラノイア論である。フロイトは、「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」(1911)において、19世紀ザクセン王国の控訴院議長であるダニエル・パウル・シュレーバーの手記を読解し、彼に生じた精神疾患を分析することでパラノイアのメカニズムについて明らかにしようとした。シュレーバーは、自らの主治医であったフレクシッヒから迫害されているという妄想に苛まれていたが、フロイト (1996b:277-278; 2009:141) はその原因について次のように論じる。

同性愛的リビドーの突出こそが、それゆえ、この精神病発生の契機だったのであり、この同性愛的リビドーの対象はおそらく初めから主治医フレクシッヒであった。このリビドー的活動に対する反抗が葛藤を惹き起こし、この葛藤から精神病的諸現象が発生してきた。

なぜ同性愛リビドーの抑圧が妄想を生み出すのかといえば、シュレーバーへの愛という「この感情的な意義が投射されて外界からの力とされ、その感情基調は反対のものへと逆転され」(Freud 1996b:275-276; 2009:139) たか

らである。つまり、シュレーバーの無意識は、自らの同性愛的リビドーが意識に上るのを防ぐため、自分から対象へと向かうリビドーを逆に外界から自分にやってくるものであると考え、その上で性愛的な感情の性質をその反対である憎悪に変換したのである。こうしてフレクシヒに対する無意識の同性愛リビドーは、フレクシヒからの迫害という妄想に変化する。パラノイアの原因とは「同性愛的傾向の克服に失敗」(Freud 1996b:296; 2009:161) することなのである。

しかしながら、なぜシュレーバーは同性愛的リビドーが意識に上ることを拒否したのか。さらに言えば、同性愛的傾向はなぜ克服されなければならないのか。それは、シュレーバーのような社会的地位を持った人物が同性愛者であることを許さない反同性愛的な社会的規範が存在するからであり、それがシュレーバーに内面化されていたからであろう。それゆえ自らの同性愛を隠しおおせた「シュレーバー症例は、社会が自らに許すことのできる極限の限界」(Hocquenghem 2000:34; 1993:24) だったのである。

次に、なぜそもそも社会は同性愛を抑圧しようとするのかといえ、オッカングム (2000:38; 1993:27) は再びフロイトを引き合いに出しながら、社会的な連帯の感情が同性愛的リビドーの昇華によって形成されているからであると説明する⁽⁶⁾。つまりフロイトとオッカングムによれば、非性的な社会的感情の前に同性愛的な感情があったのであり、現に社会は同性愛を抑圧し昇華し続けなければ崩壊してしまうのである。それゆえ、「社会全体はパラノイア的なやり方で、性愛化とその備給に対し自己防衛し(例えば同性愛の控訴院長に対して)、全力を挙げて同性愛的な脱昇華と闘う」(Hocquenghem 2000:38; 1993:28) ののである。つまり、同性愛的な欲望を享受してはばからない者たちを社会の敵だと考えるということである。フロイトがパラノイアに反同性愛的な社会的規範とその内面化を見出したのなら、オッカングムは社会そのものにパラノイアを見出したのである。

そして『ホモセクシュアルな欲望』の刊行当時、社会のホモフォビアは強化されていく傾向にあった。例えば、未成年者とのみだらな行為は法に基づいて罰せられるが、1942年以降未成年者の年齢が同性愛の場合は21歳以下へと引き上げられ、また公然猥褻罪に関する法律では1960年以降異性愛と比べて同性愛の場合には罰則がより重くなっている(Hocquenghem 2000:44-45; 1993:34-35)。このことをオッカングム (2000:39-40; 1993:29) は、「今日、

新たなシュレーバーがフロイトの時代などよりもはるかにもっと激しい嵐のような騒動を引き起こしている」ことに対する社会の防衛であると分析する。このような社会からの抑圧に対してオッカングムはどのように対処するのかについて次節で論じる。

4.2 パラノイア的な社会に対する同性愛的な挑発

オッカングムは、『アンチ・オイディプス』の議論を参照し、非人間的で欲望的な性を自らの同性愛的な欲望の理論の根底に据える。オッカングムにとって重要なのは、そのような性が「異性愛と同性愛の区別を知らない」(Hocquenghem 2000:62; 1993:51) ということである⁽⁷⁾。しかし欲望は父母子の関係に取り込まれることで異性愛や同性愛へと変化してしまう。それゆえエディプス的な同性愛もまた存在する。なお男性がエディプス的な同性愛になる過程においてその要因はいくつか存在するが、オッカングムが最も強調するのは母への固着である。参照されているのはフロイトの「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の思い出」(1910) である。幼年期における母親と男児の性愛的な結びつきが男児の意識の発展に際して抑圧されると、「男児は、母の位置に自分自身を置き、自分を母と同一化し、自分という人間を模範とし、その模範に似たものの中で新たな愛の対象」(Freud 1996a:170; 2009:50) を選択するようになる。このことはつまり「子供であったころの自分という人物の代替にして更新」(Freud 1996a:170; 2009:50) である自分とは別の男児を愛するようになるということである。こうして母親への固着が母親への同一化を生じさせ、その結果男児が同性愛になるのだとフロイトは考えた。母親への固着は同性愛を父母子の人間関係から出現させるという点で「同性愛的な欲望を正常な世界につなぎ留める最も頑丈な鎖」(Hocquenghem 2000:74; 1993:63) なのである。

しかし、社会的な正常性からは逸脱しているとみなされる同性愛もまた異性愛同様に家族という枠組みのなかから生じると考える精神分析の言説は、同性愛を正常性の枠のなかで解釈することで、その転覆的な力を隠し通そうとしているにすぎない。オッカングム (2000:58; 1993:47) は、母親への固着から生じ、常に抑圧と共にあるエディプス的な同性愛の他に、自由で非人間的な性が偶然にも同性愛的な形態を取るとした場合の非エディプス的な同性愛が存在すると考えた。オッカングムは分子的な欲望としての同性

愛の持つ力に大きな可能性を見出したのである。

以上の議論を踏まえて、抑圧的な社会を転覆させるための戦術を次のように提示することができる。『ホモセクシュアルな欲望』は、抑圧を条件としない分子的な同性愛的欲望によって、現在の社会を構成している非性的な連帯感情を再び性愛化し、欲望によって結ばれた新たな集団を作り出すことを目指す。これはいわば、依然として異性愛的な規範が強固であったにせよ、同性愛的リビドーをうまく昇華できなくなったことで異性愛的な性的規範が以前に比べて弱まり、社会における同性愛者の持つ力が増大しつつあった当時のフランスにおいて、社会そのものに対して性的挑発をけしかけること、社会を性的な欲望によって結ばれた集団に変化させるという性的革命の志向である。そして『ホモセクシュアルな欲望』が FHAR の活動に基づいていることからすれば、このような性的革命の志向は FHAR の目標そのものでもあったと言える。

欲望によって結ばれた集団という発想は、『アンチ・オイディプス』における欲望の理論に依拠している。欲望の持つ集団性は欲望が器官同士の運動であったことから理解することができる。欲望は一つの器官だけでは成り立たず、常に他の器官を必要とするのであり、その他の器官もまたさらに別の器官を必要とする。こうして欲望が見出される場所では様々な器官が接続し切断しあう集団が形成されているのであるが、その集団はそれとしての同一性を持たず、様々に変化していく。オッカングムは、欲望によって結ばれた自由な集団を、公園や浜辺といった野外での男性同性愛者の出会いの場であるハッテン場が実現しているのだと論じる (Hocquenghem 2000:151; 1993:135)。そしてオッカングムにとって FHAR のような同性愛運動もまた、性的な欲望によって結ばれたそのような集団を体現していた。

「同性愛運動における同性愛は、昇華を通過することなく直接に社会的領野を備給し、いたるところで性的なものを生み出しながら能う限り脱昇華を行う」(Hocquenghem 2000:161-162; 1993:145) のである。オッカングムにとって FHAR は、『アンチ・オイディプス』以前に、『アンチ・オイディプス』が描き出すことになる欲望の過程を先取りしてすでに実践していたのである。

5. 『ホモセクシュアルな欲望』において『アンチ・オイディプス』はどのように使用されたか

FHAR の戦略を『ホモセクシュアルな欲望』は上記の議論のように解釈したが、FHAR の試みがどれほど成功したかについては様々な評価を考えることができる。もちろん、FHAR は社会を欲望によって結ばれた集団に変えることはできなかったし、オッカングムにとってそのような集団の一つであった FHAR は内部に様々な問題を抱えたまま、1974年には消滅してしまった。しかしながら、FHAR はその後のフランスにおいて同性愛運動が発展するきっかけとなり、また『ホモセクシュアルな欲望』における反同性愛的な社会の分析は英米圏のクィア理論に寄与した⁽⁸⁾ことに鑑みれば、FHAR の活動やそれを解釈した『ホモセクシュアルな欲望』は小さくない成果を上げたように思われる。

とはいえ本稿が目指したいのは、『ホモセクシュアルな欲望』がどれほど有用であったか、あるいは有用であり続けているかということではない。むしろ『ホモセクシュアルな欲望』が『アンチ・オイディプス』の欲望の理論をどのような仕方でも利用したか、ということである。『ホモセクシュアルな欲望』における同性愛的な欲望の理論において明らかなのは、まず、同性愛的なセクシュアリティは、エディプス的なものでもありうるが、『アンチ・オイディプス』的な欲望を体現するセクシュアリティでもありうるということである。そして、ハッテン場や FHAR のような集団は分子的な同性愛的欲望を体現するのであり、オッカングムはそれを拡大することで抑圧的な社会を転覆させようとした。このことは、『ホモセクシュアルな欲望』において、『アンチ・オイディプス』が呈示する分子的な欲望によって結ばれた集団が一種の理想状態として捉えられていることを意味する。あるいは、少なくとも現在の社会よりもましな、目指すべき人間集団の在り方を示すものだと考えられている。しかしながら、『アンチ・オイディプス』によれば、欲望の分子的な状態を目指すべき目標として設定すること自体が、欲望の過程を停止させてしまう。欲望の「過程は、目標や目的と考えられてはならないし、過程自身を無限に継続することと混同されてもならない。過程の

目的化、あるいは過程の無限の継続は、厳密に言えば、その過程の早すぎる無謀な停止と同じことである」(Deleuze et Guattari 1972:10; 2006:上 21)。なぜなら、そもそも欲望の過程は目的や目標を持たないからである。欲望の運動は全く原因も目的も持たない自発的で自然な運動なのである。

なお、『アンチ・オイディプス』の応用に際して、その欲望の理論を目標として設定することの危険性をステファヌ・ナドー (2010:73) は次のように定式化している。

いつの日かおそらくは、多くの努力と、知性と、闘争と戦い、ないしは交渉によって、動的編成されていない欲望、生の欲望、対象も目標も持たない純粋な物質性、ないしは絶対的自由としての欲望に手が届くのではないか、とわれわれに思い込ませかねないこの幻影に対して慎重でなくてはならない。

ナドーの警告から読み取れるのは、対象や目的を持たない純粋な欲望を実現すべき目標に設定してしまうことの矛盾である。『ホモセクシュアルな欲望』はまさにこのような幻想を実現しようとする試みであり、そのような意味で『アンチ・オイディプス』の欲望の理論を裏切ってしまうのである。

ナドーの議論を踏まえて『ホモセクシュアルな欲望』に再び目を向けるならば、同性愛的な欲望の理論は、自らそのことに気づいていなかったものの、FHAR 内部に生じた不和をも反映していることが明らかとなる。FHAR は異性愛的な社会規範を主な標的に据えたが、社会的に正常だとされる全てに由来する抑圧そのものを批判していたのであり、正常であることそのものに反抗したのだった。しかしながら、複数の論者が指摘しているように、FHAR のこのような態度はそれ自体が新たな正常性あるいは規範性へと変化してしまった (Girard 1981:87; 市田 1992:191-192; Idier 2017:103)。このことは、1973年に追加された『アンチ・オイディプス』の補遺にて、ドゥルーズ＝ガタリが『ホモセクシュアルな欲望』を引き合いに出しながら、「放浪あるいは恋人さがしに似たブラウン運動」(Deleuze et Guattari 1972:477; 2006:下 332)と呼んだ FHAR という欲望の過程が、それ自体目標と化したことにより停止してしまったことを意味している。

『ホモセクシュアルな欲望』は、刊行当時からすでにその兆しが見え始めていた FHAR の停滞を論じてはいない。しかしその性的革命の志向が欲望

の過程の停止を理論上招いてしまうことを考慮すれば、『ホモセクシュアルな欲望』の(男性)同性愛的な欲望の理論は FHAR の帰結をも反映しているのである。よって、『アンチ・オイディプス』の応用という観点からすれば、『ホモセクシュアルな欲望』における『アンチ・オイディプス』読解の不十分さは、FHAR が『アンチ・オイディプス』を参照していない以上『ホモセクシュアルな欲望』を通じた間接的な仕方においてはあがあるが、FHAR の停滞という具体的な事象に示されているのである。

6. おわりに

本論での議論を改めて要約して提示したい。第2節では FHAR について概観したが、FHAR は反同性愛的な社会に対して反抗し、さらに社会が持つあらゆる正常性の押し付け全てを拒絶しようとしたが、組織内部においても規範性を排除しようとしたために組織としては常に不安定であり具体的な成果を上げることなく運動は潰えてしまったのだった。そしてオッカングムの『ホモセクシュアルな欲望』は FHAR の同性愛運動を『アンチ・オイディプス』の欲望の理論に基づき分析した書物であることを確認した。第3節では『ホモセクシュアルな欲望』が下敷きにしている『アンチ・オイディプス』の欲望の理論を概観した。そこでは器官の切断と接続という自由な欲望の過程がエディプス・コンプレックス的な規範性によって制限された人間的なセクシュアリティへと変化するという理論的な行程が示された。第4節では『ホモセクシュアルな欲望』を読解したが、そこでは同性愛的リビドーの抑圧によって形成された社会を転覆させるべく、同性愛的な欲望によって結ばれた集団を実現しようとする戦術が示された。第5節では『ホモセクシュアルな欲望』が『アンチ・オイディプス』の欲望の過程を実現すべき理想的な状況として捉えたことに付随する弊害について考察した。その結果、同性愛的で自由な欲望の過程を実現すべき目標に設定する『ホモセクシュアルな欲望』の理論が、まさに当の自由な欲望の過程を制限し、停止させてしまうことにつながる考え方であること、そしてこのことは FHAR の停滞に示されていると解釈できることが明らかになった。

以上の議論からすれば、オッカングムによる『アンチ・オイディプス』の

応用は端的に失敗したかのように見えるが、単純にそうであるとは言い切れない。というのも、『アンチ・オイディプス』の応用によってむしろ『アンチ・オイディプス』において提示された欲望の過程が停止してしまうこと、このことが『アンチ・オイディプス』を応用することそのものにとってどのような意味を持つのかについてははっきりしないからである。目指すべき目標を設定することそれ自身が目標の達成を不可能にするという状況を作り出す以上、オッカングムの理論は『アンチ・オイディプス』の応用という点においてうまくいっていないのは明らかである。とはいえ『アンチ・オイディプス』の理論と矛盾することのない応用だけが『アンチ・オイディプス』の使用だと言い切るのは、『アンチ・オイディプス』の様々な機能を初めから制限してしまうことになる。それゆえ、オッカングムの例を『アンチ・オイディプス』の一使用例としてどう評価するかに関しては、その例に鑑みてわれわれが『アンチ・オイディプス』をいかに使用するかにかかっているとしか今のところは言えないだろう。

最後に、オッカングムとは一見似ているようで実際のところは異なる使用方法として、ドゥルーズ＝ガタリ自身による欲望の理論の応用について検討したい。ドゥルーズ＝ガタリにとって欲望の理論は「スキゾ分析」(schizo-analyse)を実践するための基礎的な理論であった。スキゾ分析とは精神分析に対抗してドゥルーズ＝ガタリが編み出したある種の分析の実践である。精神分析は無意識を分析するが、その無意識とはエディプス・コンプレックスという普遍的な解釈格子によって父母子の人間関係における欲望として表象されてしまった無意識である。そのような無意識はエディプス・コンプレックスを自らの理論の基礎に据える以前のフロイト理論において見出された「すべてが可能になるような自由な総合の領域」(Deleuze et Guattari 1972:63; 2006:上 104)ではない。精神分析に対してスキゾ分析が分析するのは、欲望の動きに等しい自由な領域としての無意識であり、スキゾ分析においてはそのような無意識がいかに抑圧され、また社会とどのような関係にあるかが問題となる。スキゾ分析の目標は次のように提示される。

スキゾ分析が目指すのは、表現的でエディプス的、常に人工的で抑圧するものでありかつ抑制されるものであって、家族を通じて媒介される無意識を解体すること、それによって生産的な無意識に直接到達することである (Deleuze et Guattari 1972:117; 2006:上 190)。

スキゾ分析のこの目論見は、欲望の領域に接近しようとしている点において、オッカングムの試みと似ているように見える。しかしながらドゥルーズ＝ガタリは欲望の過程を不用意に目標に据えることの危険性を認識していた。ドゥルーズ＝ガタリはスキゾ分析と革命の差異を次のように示す。

スキゾ分析それ自体は、革命から出現するはずの社会体の本性の問題など提起していない。スキゾ分析は、革命そのものに当てはまるなどとは少しも主張していない。一つの社会体が与えられたとき、この社会体は欲望的生産に対してどのような場所を割り当てるのか、欲望はそこでどのような推進的役割を果たしているのか、欲望的生産の体制と社会的生産の体制の和解はどのような形をとるのか、スキゾ分析はそれらを問うだけだ (Deleuze et Guattari 1972:456; 2006:下 305)。

そもそも「スキゾ分析はそれ自体として、厳密には、何ら政治的綱領を提示しようとするものではない」(Deleuze et Guattari 1972:456; 2006:下 304)のである。このような意味でオッカングムの『ホモセクシュアルな欲望』はまさに初めから同性愛的な革命を目指す政治的綱領であったとすることができる。ドゥルーズ＝ガタリのスキゾ分析と『ホモセクシュアルな欲望』の相違はこのように示される。

注

- (1) 以下 *Edipe* 系統の語に関しては書名のみ「アンチ・オイディプス」と表記し、それ以外を全て「エディプス」と表記する。
- (2) 『ホモセクシュアルな欲望』と FHAR、『アンチ・オイディプス』の三者についてはもう少し複雑な相互関係を指摘することができる。FHAR 創設時にそのメンバーが『アンチ・オイディプス』を読むことができなかつたことは明らかだが、『アンチ・オイディプス』は FHAR が結成された当時の政治的な文脈や性的規範に対する反抗的な考え方を多く共有している。つまり『アンチ・オイディプス』の方が FHAR のような運動から影響を受けていると言えるのである。『アンチ・オイディプス』は FHAR の結成に際して重要な役割を果たしたフェミニズム運動の担い手である MLF や、FHAR を指していると思われる「同性愛戦線」について言葉少なではあるが言及している。とはいえ、オッカングムにとって『アンチ・オイディプス』は「自分が必要としていた本」(Dosse 2009a:326; 2009b:288) だったのであり、オッカングムにとって『アンチ・オイディプス』は FHAR の活動をまさに説明してくれる理論を提供してくれるように思われたのだろう。そして『アンチ・オイディプス』は当時の政治

的な文脈の中で書かれた本であるとはいえ、存在論的な次元から欲望の理論を展開する哲学書なのであり、そのような視点から FHAR の運動を解釈することは、欲望の理論の射程を明らかにするうえで有意義な試みである。

- (3) 日付や場所を伴ったより具体的な活動内容については (Sibalis 2005:272-273) を参照。
- (4) アルカディアについての記述は Girard (1981) 第3章を参考にした。
- (5) 『ホモセクシュアルな欲望』では女性同性愛について扱われることはないが、このことは FHAR における女性の排斥を反映しているように思われる。しかしながら、フェミニズム運動において見出された女性への抑圧については、男性同性愛者と女性は同じく社会的に抑圧されている、という仕方男性同性愛者と女性を逆説的にも同一視する際に何度か言及されている。
- (6) オッカングムは「精神分析的考察においてわれわれは、社会感情を対象への同性愛的態度の昇華として捉えることに慣れてきた」(Freud 1998:207; 2006:355) という一節を引用している。
- (7) 彼はこのような性の在り方をフロイトが用いた「多形倒錯」(pervers polymorphe) という語で表す。多形倒錯とは、一般に倒錯と言われるような様々な性的活動に対して何の抵抗もない性的体制の在り方を指している。確かに『アンチ・オイディプス』における非人間的な性はフロイトの多形倒錯のような考え方を着想元としているだろう。しかしドゥルーズ＝ガタリは、フロイトのように、いわゆる異性愛的な性行為ではないからといってそれ以外の性的行為を倒錯であるとは捉えないし、あらゆるものに性的な性格を見出している点ではフロイト理論をさらにラディカルなものにしている。ドゥルーズ＝ガタリ (1972:348; 2006:下 147) によれば、「本当は性愛はいたるところに存在する。官僚が書類を愛撫する態度、裁判官が判決を下す態度、実業家が金を使う態度、ブルジョワがプロレタリアのおカマを掘る態度等々の中に」。このことに鑑みると、オッカングムは『アンチ・オイディプス』における非人間的な性の範囲を狭めているように思われる。おそらくオッカングムは異性愛と同性愛の対立を強調するために多形倒錯的な性の在り方の中でも同性愛を選び出して論じているのだろう。そこには正常で窮屈な異性愛に対して同性愛を規範から解放された自由なものとして打ち出すというある種の政治的な意図が垣間見えるように思われる。
- (8) セジウィック (2020:156-157; 2003:126) によれば、1980年代なかばにおいてクイア理論の特権的な対象であったパラノイアの理論的定式化に貢献したのが『ホモセクシュアルな欲望』であった。

参考文献

- 市田 良彦 1992 「一億二千万の倒錯者へ」市田 良彦編訳『三〇億の倒錯者 ルシエル シュ十二号より』インパクト出版会。
- ナドー、ステファヌ 2010 『アンチ・オイディプスの使用マニュアル』信友 建志訳、水声社。
- 松木 邦裕 1996 『対象関係論を学ぶ クライン派精神分析入門』岩崎学術出版局。

- Deleuze, Gilles. 1990. *Pourparlers: 1972-1990*. Paris: Minuit. (2007『記号と事件 1972-1990年の対話』宮林 寛訳、河出書房新社)
- Deleuze, Gilles. & Guattari, Félix. 1972. *L'anti-Œdipe: Capitalisme et schizophrénie I*. Paris: Minuit. (2006『アンチ・オイディプス』(上)(下)宇野 邦一訳、河出書房新社)
- Dosse, François. 2009a. *Gilles Deleuze, Felix Guattari: Biographie croisée*. Paris: Découverte. (2009b『ドゥルーズとガタリ 交差的評伝』杉村 昌昭訳、河出書房新社)
- Freud, Sigmund. 1996a. Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci. *Gesammelte Werke*, Band VIII, pp.128-211. Frankfurt am Main: S. Fischer. (2009「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の思い出」甲田 純生・高田 珠樹訳、『フロイト全集 11』pp.1-97、岩波書店)
- Freud, Sigmund. 1996b. Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides). *Gesammelte Werke*, Band VIII, pp.240-321. Frankfurt am Main: S. Fischer. (2009「自伝的に記述されたパラノイアの一例に関する精神分析的考察」渡辺 哲夫訳、『フロイト全集 11』pp.98-187、岩波書店)
- Freud, Sigmund. 1998. Über einige neurotische Mechanismen bei Eifersucht, Paranoia und Homosexualität. *Gesammelte Werke*, Band XIII, pp.195-208. Frankfurt am Main: S. Fischer. (2006「嫉妬、パラノイア、同性愛に見られる若干の神経症的機制について」須藤 訓任訳、『フロイト全集 17』pp.343-355、岩波書店)
- Girard, Jacques. 1981. *Le mouvement homosexuel en France 1945-1980*. Paris: Syros.
- Hocquenghem, Guy. 2000. *Le désir homosexuel*. Paris: Fayard. (1993『ホモセクシュアルな欲望』関 修訳、学陽書房)
- Huard de la Marre, Geoffroy. 2009. Une politique du désir: Hocquenghem au-delà du FHAR. *Chimères* 69(1):9-21.
- Idier, Antoine. 2017. *Les vies de Guy Hocquenghem : politique, sexualité, culture*. Paris: Fayard.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. 2003. Paranoid Reading and Reparative Reading, or, You're So Paranoid, You Probably Think This Essay Is About You. *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*, pp.123-151. Durham: Duke University Press. (2020「パラノイア的読解と修復的読解、あるいは、とつてもパラノイアなあなたのことだからこのエッセイも自分のことだと思ってるでしょ」岸 まどか訳、『エクリヲ』12:52-194、映画美学校批評家養成ギブス第3期有志一同)
- Sedgwick, Eve Kosofsky. 2010. Anality: News From the Front. *Studies in Gender and Sexuality* 11(3):151-162.
- Sibalis, Michael. 2005. Gay liberation comes to France: the Front homosexuel d'action révolutionnaire (FHAR). *French history and civilization: Papers from the George Rudé Seminar* 1:265-276